



国指定史跡 鎌刃城跡

(財)滋賀県文化財保護協会 調査普及課
課長 木戸 雅 寿

1. 鎌刃城の歴史

鎌刃城跡は滋賀県米原市番場に位置する戦国期の山城です。山城の存在としては従前から知られていましたが、その実態についてはよくわかってませんでした。

城の歴史は番場の領主、土肥氏の築城に始まると言い伝えられています。土肥氏は鎌倉幕府源頼朝の御家人で、相模国土肥実平の子孫といわれています。承久の変の後、近江国箕浦庄（現在の米原市近江町箕浦）の地頭に補任されてからこの地の土豪として活躍していたものと考えられています。その後、土肥

氏は室町幕府の奉公衆となっていました。15世紀には、江北の守護京極氏によるたびたびの横領により、その勢力は次第に衰えていったようです。言い伝えとは違い土肥氏の時代にはまだ詰め城としての山城は未発達な時代です。近年では鎌刃城の築城が土肥氏の時代にさかのぼることはないと考えられています。むしろ、土肥氏の城は、麓にある城館「殿屋敷遺跡」ではないかと発掘調査の結果では考えられるようになってきました。

一方、『今井軍記』の文明4年（1472）8月11日の条には、鎌刃城は「堀の城」として

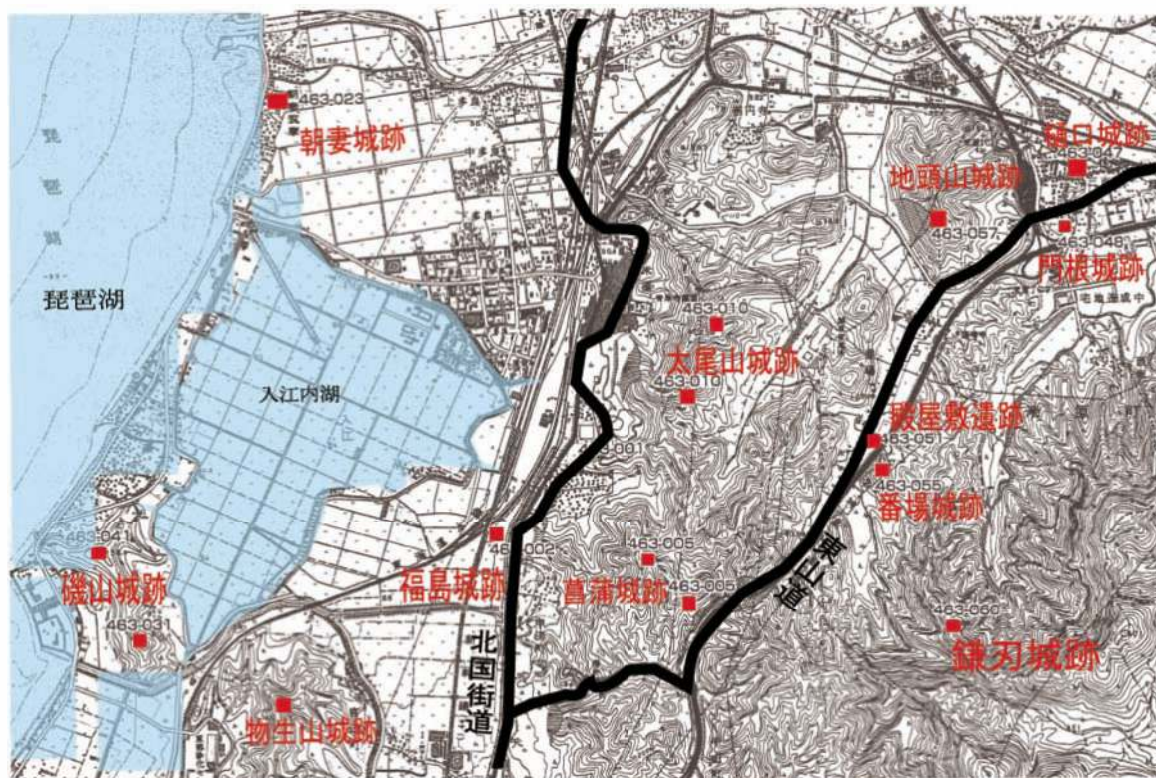


図1 鎌刃城跡位置図



写真1 鎌刃城全景

堀次郎左衛門の居城として出てきます。城はこの時京極氏の被官今井秀遠により攻められています。堀氏の出自は明らかではありませんが、六角高頼の家臣多賀清直の配下と考えられており、佐々木氏の隋兵として『江州佐々木南北諸士帳』に門根城主堀遠江守堀頼氏の子、鎌刃城主堀二郎として出てきます。したがって、衰退した土肥氏に変わり、この頃には鎌刃城の城主としてこの地域を治めていたものと考えて間違いがないでしょう。

天文4年(1535)以降、江北の京極氏と江南の六角氏との領地争いは熾烈を増していきます。その境目に当たっていたのが、この鎌刃城といわれており、領地を巡る紛争に際して、鎌刃城は境目の城として城取り合戦に巻き込まれていきました。永禄年間頃、京極氏自身が衰退し、江北の実権が浅井氏に移ると、堀氏は浅井氏に属するようになります。そんな中、織田信長は永禄10年(1567)、浅井氏と同盟関係を結び、翌11年に足利義昭を奉じて近江の地を悠々と通過して上洛を果たします。しかし、元亀元年(1570)4月、反織田勢力は強まり、信長は越前の朝倉氏攻めを敢行します。そして、祖父代から縁のあった浅井氏は信長から離反します。六月、信長の侵攻に対して、長政は江州と濃州の国境にある「たけくらべ」(長比城)・「かりやす」(苅安城)の両所に要害を構え、鎌刃城主堀秀村と老臣樋直房に守らせたことが『信長公記』に見え

す。当時、堀氏の当主であった秀村は幼少であったため、樋口が補佐していました。しかし、一瞬にして両城は信長に落とされてしまいます。結局、堀氏は信長方に寝返り、坂田郡六万石の領地を得ました。これに対し、元亀2年5月、浅井氏は浅井井規を大将とする軍で、当時横山城主であった木下藤吉郎と、その配下、鎌刃城の堀・樋口氏を攻めています。結局、鎌刃城と堀・樋口氏が再び浅井側に返ることはありませんでした。その後、理由は定かではありませんが、天正2年(1574)に堀・樋口氏は突然改易され歴史の表舞台から消えていきます。浅井氏の支配、堀・樋口氏の没落とともに江北支配は羽柴秀吉へと移行し、長浜城の築城により鎌刃城の存在意義も失われ廃城になったものと考えられます。

2. 鎌刃城跡の構造と発掘調査

鎌刃城は標高384mの山頂に築かれた山城です。縄張りは(図2参照)、中央の最も高い位置に主郭Iを配し、その南の一段下がった一に南郭Iを、堀切を挟んで南郭IIを配して、それらを中心として3方の尾根を利用して城の施設を配置しています。主郭Iの北尾根には、北I、II、III、IV1、IV2、V、VIの7つの連続する郭を連続して配し、その先を4つの連続する堀切で切断し防御しています。南IIの郭から伸びる尾根には、西I、IIとIIIとの間に堀切を配し、西IIIとIVの間に堀切を配し、西V、VI、VII、VIIIと郭を連続させて、その先端に二重の堀切で防御しています。南IIに続く南の尾根には大小8つの堀切で敵の侵入を防いでいます。

米原市では、これらの縄張り調査で確認された城の構造が正しいかどうか、城跡の保存状態が良いかどうかを確かめるために、平成10年度から平成14年の5カ年計画で発掘調査を実施しました。結果、主郭Iの発掘調査では、郭全体の普請(土木工事)を石垣を使用して行っていることが判明しました。特に郭

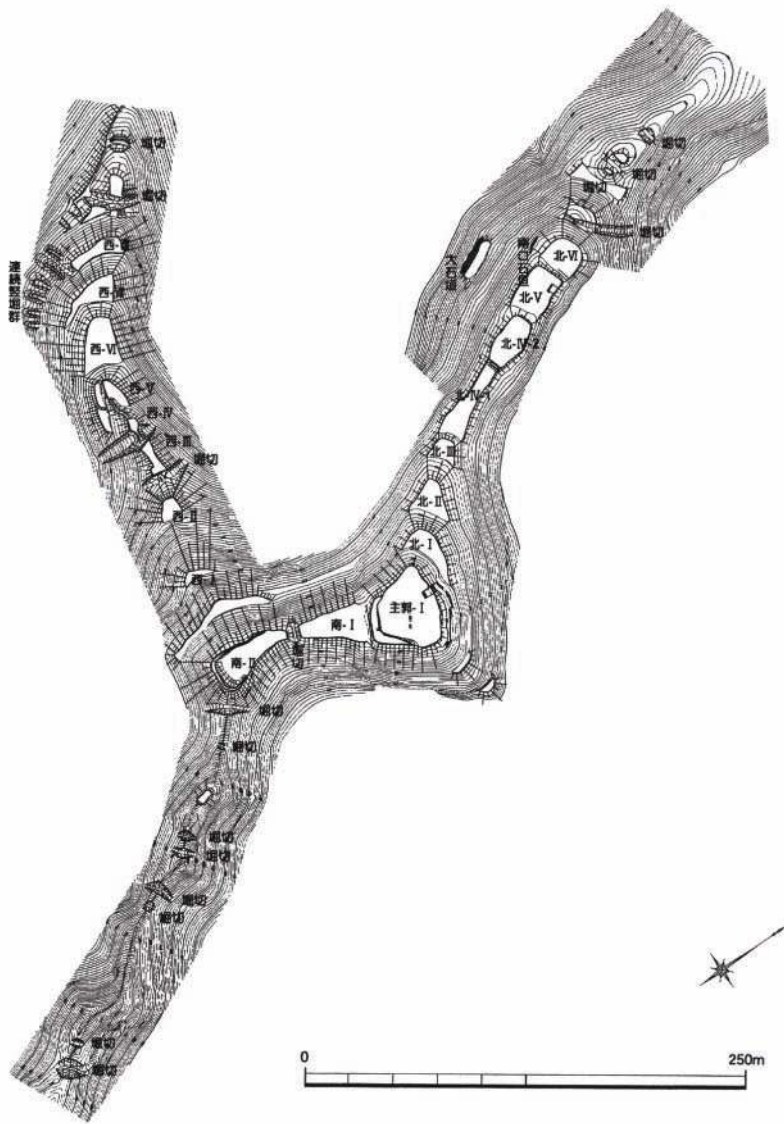


図2 鎌刃城概要図

の入り口部分である虎口では階段と通路にらより折れを造り枡形として門に至る防御性の高い構造であることがわかりました。また、郭内には礎石建ちの大きな建物が敷地一杯に建てられていることが判明しました。北VIの郭では、土塁で囲われた窪地からは、天守の前身とも考えられる5間×5間のおおぐらの大櫓の跡と櫓に入る通路が発見されました。隣接する北Vの郭からは御殿の礎石と郭に入る大きな虎口が発見されました。

これらのことから、鎌刃城は境目の城としての砦的な城郭ではなく、城主の生活を中心とした立派な戦国期の山城である事がわかってきました。石垣作りであることと櫓や御殿が山頂にあることから、当時においては、かなり先進的な城造りであったことがうかがえます。しかし、これらの遺構が、堀氏が浅井方、六角方、織田方についていた何



写真2 本丸虎口門跡



写真3 本丸階段



写真4 本丸礎石立建物

時の時期のものかは未だ調査でも明らかになっていません。将来の調査に期待したいです。

3. 国指定への歩みとまちづくり

深い山間の山林に没し、長い年月眠りについていた鎌刃城が、地域の財産として再び注目を浴びるようになったのは平成3年のことでした。発端は、旧米原町番場地先において実施された団体営ほ場整備事業です。その事業区域に殿屋敷遺跡という遺跡が存在し、発掘調査がされたからです。調査の結果、当該地からは、13世紀末～15世紀初頭にかけての掘立柱建物が発見されました。これらの遺跡は、鎌刃城の城主の下屋敷ではないかと考えられ、そこから宿や町としての番場の姿が考えられました。殿屋敷の主の居城として、鎌刃城がにわかに脚光を浴びたのです。これを契機に、平成4年から地元で「番場の明日を知り明日を考える会」が発足し、平成9年までの間、幾度となく学習会が持たれました。その結果、平成9年5月15日、鎌刃城は土地所有者の同意を得て、町の文化遺産として、米原町指定文化財となりました。6月には番場の蓮花寺を会場とし歴史講演会「番場鎌刃城-戦国の近江をを探る-」と題し、戦国期の山城の話や番場の城の歴史、城の整備とまちづくりの講演があり、本堂は聴衆で埋め尽くされました。歴史へのロマンは大きく高まりつつありました。平成10年からは、旧町で

「米原町指定史跡鎌刃城跡調査整備委員会」が設置され、5カ年計画で発掘調査し基本資料を得る調査が開始されました。平成11年には、地元で「第1回近江山城サミット」が開催され、県内の保存会のメンバーが一堂に会し「山城とまちづくり」が話し合われました。発掘調査は、地元の有志や夏休みには子供達の手で行われ、それらの体験をまとめた文集などが発表されました。その後も、毎年のようにシンポジウムや講演会、見学会が催されました。そして、平成14年に滋賀県指定史跡に指定されました。5月には地元の方々の手で整備された「主郭虎口整備」が完成。11月には記念すべき「近江中世城跡琵琶湖一周のろし駅伝」が開催されるなど、まちづくりイベントは大きく花開きました。平成17年2月、米原町は合併により米原市になり、3月、遂に鎌刃城はその価値が認められ、国の史跡に指定されました。かつては、深い山間の山林に没し、長い年月眠りについていた鎌刃城は、いまや全国にその名が知られるようになり、県内外からの多数の見学者が訪れています。このように、鎌刃城跡は歴史的価値だけではなく、まちぐるみの取り組みのなかで、地域の歴史や文化財を守り続けるという、地元と密着した文化財として愛されています。

参考文献

『鎌刃城跡』『米原町内中世城館跡分布調査報告書』米原市埋蔵文化財調査報告書第1集
米原市教育委員会 2006. 3

『戦国の山城・近江鎌刃城』米原市教育委員会編 サンライズ出版 2006. 2

「鎌刃城」『近江の山城ベスト50を歩く』
サンライズ出版 2006. 10

(写真提供 米原市教育委員会)

滋賀文化財教室シリーズ No.229号

発行年月日 2009年3月10日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525